東京外国語大学大学院　言語・地域文化研究　第30号　2024年
Language, Area and Culture Studies No.30 , 2024

〈論文〉

対称詞使用に見るポーランド語の「民主化」

川本 夢子

Democratization of Polish Language in the Light of Forms of Address

Yumeko KAWAMOTO

Abstract

This article describes the expansion of a non-honorific form of address (ty) use in Poland as a phenomenon of the democratization of language. The key element of democracy is equality, which is, according to Polish linguists, symbolized by the use of the form ty. A close distance between interlocutors is also one of the features of a democratic society, which is manifested by a simplified transition from honorific forms (pan/pani) to a non-honorific form (ty). Many conservative Polish linguists observe this trend as a negative influence of English-speaking culture and express concern about the destruction of the Polish tradition at a linguistic level. The results of a performed questionnaire survey and the analysis of comments show, however, that ordinary Polish speakers positively perceive the easy way of transitioning to the form ty. In their opinion, it allows to effectively reduce a distance between interlocutors. On the other hand, there is also a conservative approach, with speakers preferring the use of the forms pan/pani in certain situations. Roger Brown and Albert Gilman, authors of T/V theory, predicted that in many European languages the honorific forms will disappear and the non-honorific form will completely dominate in the near future, but the current situation with the Polish forms of address does not confirm this diagnosis.

キーワード：ポーランド語、対称詞、民主化、コーパス
Keywords: Polish language, forms of address, democratization, language corpus

目次

1 はじめに：「言語の民主化」について
2 ポーランド語対称詞使用の歴史的変遷
3 アンケート調査
　3.1 調査方法
　3.2 調査結果
4 おわりに

本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

1. はじめに:「言語の民主化」について

1989 年の体制転換以降、中・東欧諸国で進んだ民主化のプロセスは、政治学や社会学をはじめとする様々な分野において研究対象とされてきた。連帯運動に象徴されるポーランドの民主化も例外ではない。社会主義体制の崩壊後、検閲が撤廃され、情報伝達の媒体であるメディアが著しい発展を遂げたことで、ポーランドの民主化は政治体制レベルのみならず、日常的な社会生活においても顕著な変化を引き起こした（Duda 2001: 76）。

ポーランド社会の民主化に伴う変化は、言語的側面でも見られるようになった。これはポーランドの言語学界において近年指摘されている現象で、「言語の民主化」（demokratyzacja języka）として表現されることが多い（Ożóg 2001, 2006; Marcjanik 2007, 2015 など）。この概念の定義については様々な見方があるが、まずはその基本となる「民主主義」（demokracja）という語について、ポーランド語辞典の定義を見てみたい。もっとも代表的な現代ポーランド語辞典である *Wielki słownik języka polskiego PAN*（PAN ポーランド語大辞典、以下：WSJP PAN）および *Słownik języka polskiego PWN*（PWN ポーランド語辞典、以下：SJP PWN）では、「民主主義」（demokracja）がそれぞれ以下のように定義されている[1]：

> WSJP PAN:
> Forma funkcjonowania grup społecznych polegająca na tym, że wszyscy ich członkowie są równi i mają wpływ na podejmowane decyzje, zaś osoby niezgadzające się z ustaleniami większości muszą je zaakceptować.
> 社会集団が機能する形態のひとつで、社会の構成員はみな平等であり、同様の決定権を持ち、多数派の判断が集団全体の判断になるため、反対派もその判断を受け入れるべきだとするもの。

> SJP PWN:
> Forma organizacji życia społecznego, w której wszyscy uczestniczą w podejmowaniu decyzji i szanują prawa i wolność innych ludzi.
> みなが平等に決定権を持ち、他者の権利と自由を尊重し社会生活を営む組織形態のこと。

上に挙げた定義では、社会全体で平等さが重要な価値として認められている状態を民主主義の基本と捉えていることがわかる。すなわち「民主化」（demokratyzacja）はこの民主主義の理念に沿った変化として理解することができ、さらに「言語の民主化」は言語レベルでの変化を指すということになる。この「言語の民主化」について、Kudra & Kudra（2006）は次のように定義している[2]：

> Demokratyzacja języka to (…) zmiany języka o charakterze powszechności, dostępności, egalitaryzmu, języka rozumianego jako system, substancja językowa, tworzywo; rozumianego szeroko jako „zbiór możliwości", jako „potencjał językowy" (Kudra & Kudra 2006: 342).
> 言語の民主化とは、普遍性や利便性、平等性を特徴とする言語そのものの変化のことである。ここでの言語は体系、要素、物質として捉えられ、（言語は）様々な可能性が集約されたもの、変化する能力を潜在的に備えているものとして理解される。

1 定義の和訳は筆者による。
2 引用の和訳は筆者による。以降、本稿のポーランド語引用部分の和訳はすべて筆者によるもの。

上で定義された「言語の民主化」として捉えられる変化は、言語体系レベルでの大きな変化ではあるが、徐々にゆっくりと現れるため、その言語の話者がすぐに気づくものではない（同上：342-343）。これに対し、特定の言語話者が気づきやすい変化は「言語内における民主化」（demokratyzacja w języku）と表現することができる。この概念は言語を情報伝達の手段として捉え、言語の機能的側面に着目するもので、ここでの「民主化」は言語の使用方法・使用状況における変化を指す（同上：343）。すなわち「言語内における民主化」は、システム全体の変化を示す「言語の民主化」と比べて変化の速度がはやく、日常的なコミュニケーション場面でその変化を直接観察することができる（同上）[3]。

本稿では、ポーランド語における対称詞[4]使用の変化をこの「言語の民主化」および「言語内の民主化」と結び付けて考察を行う[5]。ポーランド語の対称詞には大きく分けて敬称の pan（男性形）と pani（女性形）、親称の ty があるが、1989 年の体制転換以降、親称（ty）の使用範囲が著しく広がったことが指摘されている（Ożóg 2001: 82, Grybosiowa 2002: 5 など）。親称の使用は平等さを象徴するため、その使用範囲の拡大はまさに「言語内の民主化」の一例として捉えることができよう。対称詞使用におけるポーランド語の「民主化」については、敬称の pan/pani に代表されるポーランド語ならではの伝統的価値が失われつつあるという危機感を示し、批判的な立場を取る言語学者が多い（Grybosiowa 1990: 92, Dąbrowska 2001: 188 など）一方で、新しい価値観を受け入れようとする見方もあり（Łaziński 2006: 104-110, Sawicka 2011: 59）、ポーランド語の研究者たちの間でもいまだ対称詞使用の「民主化」の捉え方が定まっていない。

ポーランド語の「民主化」を議論する場面で度々比較されるのが、「民主的言語」（język demokratyczny）としてのスウェーデン語である。スウェーデン語は「言語的民主主義」（demokracja językowa）を象徴する存在であり、いまだ「言語の民主化」の過程にあるポーランド語とは違いそのプロセスを既に終えた言語として捉えられている。特に本稿で扱う対称詞使用の観点でスウェーデン語は興味深い言語である。1960 年代に敬称（ni）が撤廃され、親称（du）がほとんど唯一の対称詞となった（Łaziński 2006: 139-140）点において、まさに民主主義の根幹である平等さを象徴しているといえよう。

以上をふまえ、本稿では一般のポーランド語話者が対称詞使用における「民主化」に対してどのような意見を持っているのかを調査課題とする。特に、敬称を用いていた相手に親称を用いるようになる「ty への移行」のプロセスが簡素化されている現象を、ポーランド語話者がどのように捉えているのかという点を明らかにしていく。

3　「言語の民主化」の定義は言語によって異なると考えられる。例えばチェコ語における「言語の民主化」は、特に文学作品分析の観点から「口語表現の使用範囲の拡大、書き言葉と話し言葉の接近」を特徴とする変化として定義される（Balowska 2006: 287）。

4　「対称詞」の語は「二人称代名詞」に代わる表現として鈴木（1973: 134）が提案したもの。本稿ではポーランド語の人称表現の特徴をふまえ、この「対称詞」の語を用いる。川本（2022: 182-183）も合わせて参照されたい。

5　対称詞使用の変化だけでなく、本来罵倒表現として用いられる卑語などが日常会話で気軽に用いられるようになったこと（特に若者層で多く見られる）や、英語からの借用語の多用、省略表現の多用なども、ポーランド語の「民主化」に当てはまる現象として指摘されることがある。本稿では、対称詞使用の変化に絞って取り上げる。

2. ポーランド語対称詞使用の歴史的変遷

ポーランド語の対称詞使用における「民主化」が指摘されていることはすでに述べた通りであるが、具体的にどのような現象が起きているのだろうか。ここでは、主に敬称 pan/pani の歴史的変遷を辿りながら、1989 年以降の現代ポーランド語における対称詞使用の実態を記述していく。

2. 1. ポーランド貴族の肩書

敬称として用いられる pan/pani などの語[6]は、もともとシュラフタと呼ばれるポーランド貴族の肩書[7]として用いられていたもので、pan は「主人、領主、地主」という意味を持つ名詞である（白水社 2009: 346）。かつては wasza miłość[8] やその省略形 waszmość などの語[9]と合わせて用いられていたが、18 世紀中ごろからこの pan/pani などの語が単独で対称詞として用いられるようになっていった（Stone 1989: 136）。この現象はポーランドの国民的詩人アダム・ミツキェヴィチの名作『パン・タデウシュ』[10]を始めとする文学作品における登場人物のやり取りからも読み取ることができ、19 世紀初頭にはこの pan/pani の単独使用が敬称の最もスタンダードな表現として定着していったとされている（Rachwał 1992: 43-44, Przybylska 1999: 115）。

対称詞としての pan/pani などの語は、シュラフタ同士がお互い貴族としての対等な地位を認め合い、同じコミュニティに属する仲間への絆を表す象徴として広く用いられるようになった。シュラフタ以外の社会階級に属する者には ty を、シュラフタには pan/pani を用いることによって、貴族としての繋がりが強調されていたのである。ここで着目したいのが、当時のシュラフタのコミュニティにおいて、pan/pani の語を用いることが対等な関係を象徴していたということである。現代ポーランド語では親称の ty を用いることが平等さの象徴となっている（Marcjanik 2007: 36）が、かつてのポーランド貴族においては、敬称をお互いに用いることで、対等な立場にある者として相手を尊重していたのである。このことから、ポーランド語話者にとって対称詞の使用が、立場の平等さや同じコミュニティ内の絆と結びついていることがうかがえる。ポーランド語の「民主化」を考える上で、この pan/pani などの語が 18 世紀から 19 世紀にかけて辿ってきた歴史的変遷は、非常に興味深いものであると言えよう。

2. 2. 20世紀前半のポーランド語対称詞：pan/pani, wyとty

20 世紀になると、敬称として定着してきた pan/pani などの語が階級による上下関係を必要以上に強調するとして、代わりに他のヨーロッパ言語でも一般的に用いられている wy（敬称としての二人称複数形）をポーランド語でも広く用いるべきだという主張が見られるようになる。Juliusz Grosse

6 ポーランド語の敬称は数と性によって pan, pani, panowie, panie, państwo に分けられる。本稿では便宜上これらをまとめて「pan/pani などの語」と表現する。

7 川本（2021: 274）も合わせて参照されたい。

8 直訳すると「あなたの愛」。ドイツ語でもかつて同義の肩書 Euer Liebde が貴族に対し用いられていたとされる（Łaziński 2006: 24）。

9 具体的には waszmość mości pan のように非常に長い敬称のバリエーションがいくつもあり、省略形の waćpan や pan を含まない waść, waszeć などの表現もシュラフタに対する敬称として用いられていた（Łaziński 2006: 24-28）。

10 日本でも工藤幸雄の邦訳（1999）やアンジェイ・ワイダ監督の映画『パン・タデウシュ物語』（1999）で知られている。

は 1906 年に自身の立場を以下のように表明している：

> To użycie „Wy”, jako drogi pośredniej między „Ty” i „Pan”, powinno złączyć się z zupełnem wyrzuceniem przemawiania przez „Pan”. Niech pod tym względem zapanuje postępowa równość wzajemna, bez poniżania, niech wszyscy się jednako do siebie zwracają, a będą szczęśliwe tej reformy skutki (Grosse 1906: 50).
>
> Ty と Pan の間にある Wy の使用を広めると同時に、Pan の使用は完全に廃止されるべきである。これにより革新的な平等さが実現し、皆が相手を軽蔑することなく同じように相手を呼び、この改革に満足することだろう。

Grosse の主張は pan/pani の使用を完全になくそうというもので非常に極端ではあるものの、wy の使用に可能性を見出した点で新しい視点をもたらしたと言える。ポーランド語の語源辞典を編纂した Aleksander Brückner も同様の立場を表明しており、「我々のご主人様」（„nasi panowie”）と「平凡な農民」（„proste parobki”）の差を強調し不自然な集団意識を生む pan よりも、wy を積極的に使っていくべきだと記している（Brückner 1916: 10）。

一人の相手に対して用いる二人称複数形の wy はポーランド語にも存在していた[11]が、17 世紀ごろから一般的な対称詞としての機能を失い、18 世紀には標準ポーランド語の対称詞として用いられることはほとんどなくなった（Wojtak 1992: 36-37）。そのため、当時無理に wy の使用を広めることは難しいとする指摘も見られた。敬称の pan/pani を廃止し wy を用いるべきと唱えた Grosse の記述に対し、Kazimierz Nitsch は次のようにコメントしている：

> Jakkolwiek sympatya moja osobista jest w znacznej mierze po stronie autora odezwy, to przecież zapatruję się dość sceptycznie na możność rozmyślnego przeprowadzenia proponowanego sposobu. Zdecydują o tem różne, często poza naszą władzą stojące czynniki (Nitsch 1907: 58).
>
> 筆者 [Grosse] は私にとって個人的にとても親しみを感じる人物であるが、彼の提案しているこの用法を採用することは極めて困難だと考える。[対称詞の] 用法に関わる条件は様々で、必ずしも私たちがコントロールできるものではない。

20 世紀に入るとシュラフタの存在が薄れ[12]社会構造が変化したため、pan/pani などの語は直接貴族階級を象徴するものではなくなった。かつてシュラフタ以外の階級で ty が広く用いられていたように、pan/pani などの語も、一般的な敬称としてその使用範囲が広がっていったのである（Łoś 1916: 10）。こうして、標準ポーランド語の対称詞は大きく分けて親称の ty と敬称の pan/pani という二択に落ち着いた。

2. 3. ポーランドの民主化後：親称（ty）使用範囲の広がり

旧ソ連の支配下にあった社会主義時代には「国民」（obywatel）や「同志」（towarzysz）の語[13]が対

11　今日でも一部の村落では wy が敬称として用いられている（Sikora 2010）。

12　シュラフタの階級は第一次世界大戦終結後に解消された。

13　社会主義時代特有の対称詞使用に関しては Klemensiewicz（1946）が詳しく記述している。

称詞の一種として導入されたが、一般的なポーランド語話者の間ではその使用があまり定着せず[14]、1989 年の体制転換を境に消滅していった。政治レベル、社会生活レベルの双方でポーランドの民主化が進むと、様々な新しいコミュニティ（wspólnota）が現れ、人々は同じコミュニティに属する者同士の横のつながりを強く意識するようになった（Grybosiowa 2002: 5）。今日では親称の ty の使用がまさにこの横のつながりを象徴するもので、同じコミュニティに属する相手に対しては、年齢や地位に大きな差がある場合でも、親称の ty が積極的に用いられる傾向にある（Grybosiowa 2003: 19）。現代ポーランド語において、敬称の pan/pani などの語は上下関係を示すものではなく、あくまで話者間にある精神的距離が遠いことを示すにすぎない（Grybosiowa 1990: 90）。敬称使用により表されるこの距離も早い段階で縮められることが多いため、pan/pani などの語は「まだ ty ではない相手」「年齢や社会的役割などにより距離がある相手」に対し形式的に用いるものとして認識されていると言える（同上）。

ポーランド社会では通常、初対面の相手に対しては（相手が子供である場合を除き）敬称の pan/pani を用い、そこから一定の期間を経て、親称の ty を用いる関係に移行するというのが礼儀正しいとされている。このプロセスは「ty への移行」（przejście na ty）と表現されるもので、職場での関係や近所付き合いなどで知り合った相手と一定の期間を経たのち、お互いの同意があった上で起こる対称詞使用の変化を指す。年齢や地位が上の立場の者もしくは女性が親称へ移行する提案をし（Marcjanik 2007: 42）、かつては酒の入ったショットグラスを一緒に一気飲みする[15]ところまで終えてようやく相手を ty で呼べるようになる、という儀式的性格の強いものであった（Marcjanik 2020: 275）。このプロセスは特に 1989 年以降、簡略化されることが多くなり、短い付き合いでもすぐ ty で呼び合うようになったり、わざわざ提案をせずいきなり ty で呼ぶようになったりと、「ty への移行」は早く簡単に済ませてしまおうとする傾向が見られるようになった（Grybosiowa 1990: 90, Marcjanik 2020: 274）。21 世紀になると、初対面の相手に対していきなり親称の ty を用いるケースも稀ではなくなり、話者間のつながり・対等な関係を最初から前面に押し出す風潮が強くみられるようになっているが、これはポーランド語文化の伝統に背く相手の「フェイス」侵害[16]だとする指摘もある（Sikora 2011: 85）。親称は現代ポーランド語において話者間の平等さを象徴することから、敬称からの移行に対する抵抗感が薄れ ty を積極的に使おうとする姿勢はまさに、対称詞使用におけるポーランド語の「民主化」を反映していると言えよう。本稿冒頭で触れた「言語の民主化」および「言語内における民主化」の概念を応用させると、「ty への移行」プロセスの簡略化や初対面の相手に対する親称使用は「言語内の民主化」として捉えられ、これらの現象が時間を経て社会に定着していくことにより、「言語の民主化」が可視化されていくと理解することができる。

2. 4. 英語・アメリカ文化の影響

ここまで挙げてきたポーランド語の対称詞使用における「民主化」の例は、すでに 1 章で述べた通り、多くのポーランドの言語学者から批判されている。その大きな理由の一つとして、他の国や地域の言語・文化、特にアメリカ文化と英語がポーランド語に悪影響をもたらしているという考え方

14 警察や軍といった権力層に属する人々の間では、これらの対称詞を用いる頻度も高かった。

15 この儀式はドイツからポーランド文化に入ってきたもので、ドイツ語の表現をそのまま用いポーランド語で bruderszaft と呼ばれている（ドイツ語で「兄弟仲」を意味する語）。

16 ここでの「フェイス」は Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論における概念を適用したものである。

がある。1990 年代から繰り返しこの考えを強調している Kazimierz Ożóg は、以下のように述べている：

> Amerykańskie wzorce przenikają także do kultury polskiej, a język to wszystko odbija. Dla Polaków bardzo atrakcyjne się stają amerykańskie modele życia. Najważniejszą sprawą jest tu sukces i indywidualizm, poczucie własnej ważności i niezależności, bardzo istotna jest swoboda wyboru i tolerancja (Ożóg 2006: 108).
>
> アメリカを手本にする傾向はポーランド文化においても観察され、言語にも浸透してきている。ポーランド人にとって、アメリカの生活スタイルがとても魅力的なものになってきたのである。成功を収めること、個人主義、自身の価値と独立を尊重することが最優先であり、選択の自由と寛容さがとても重要な価値となった。

このように「言語のアメリカ化」（amerykanizacja języka）も「言語の民主化」と並んで指摘されるようになり（同上）、その具体的な例としては職場における一括した親称使用が挙げられる。年齢差や役職による上下関係に関わらず、職場という同じコミュニティに属する者同士のつながりや平等さに目を向け、皆がお互いに ty で呼び合うという会社・組織が近年とても多くなっている。多くのポーランド語学者やマナー本の著者たちはこの傾向をアメリカの言語文化による行き過ぎた影響だとし批判的に評価している（Kamińska-Radomska 2015: 134-143）が、一方でこの傾向に前向きな立場も（多くはないが）見られる。その一例として、Ewa Sawicka の記述を挙げておきたい：

> Takie ujednolicenie formy zwracania się do siebie nawzajem naprawdę integruje zespół, dlatego w wielu firmach obowiązuje amerykański zwyczaj mówienia sobie po imieniu (Sawicka 2011: 59).
>
> 全員がこのように [親称で] 呼び合うことで実際に社内チームが団結するため、多くの企業でお互いを名前で呼び合うアメリカ的習慣が取り入れられているのだ。

ポーランド文化の伝統的価値やポーランド語特有の「礼儀」を強調し近年の職場における親称使用の広がりを批判する立場が多い中、Sawicka は対称詞使用の実用的側面に着目し、仕事仲間を ty で呼ぶことにより組織全体にもたらされるメリットに言及しているのである。

ポーランド語において「言語のアメリカ化」が問題視される理由は、英語の you を親称の ty と同等のものと捉えるポーランド語話者の誤った認識にある。つまり、多くのポーランド語話者は英語の you を直接的な、フランクな親称と受け取る傾向にあるが、実際には、この you は様々な相手に対し広く用いられる対称詞で、必ずしも対等な関係性や精神的距離の近さを表すものではない。この英語の you に触れている記述を以下、紹介しておく：

> Angielskie you jest oczywiście wielce demokratyczne, doskonale służy wyrażaniu równości społecznej, lecz można też w nim widzieć środek budowania dystansu (Wierzbicka 1999: 212).
>
> 英語の you はもちろんとても民主的で、社会の平等さを表現する手段になり得るが、一方で相手との距離を取ることも可能である。

> Mówienie sobie po imieniu nie wynika z braku szacunku. (…) Mówienie po imieniu jest nie tylko sympatyczne, ale i wygodne (Warakomska 2005: 269).

相手を名前で呼ぶことは、決して敬意が欠けているということではない。（…）名前で呼ぶことは親しみが沸くだけでなく、便利でもあるのだ。

Trzeba zaznaczyć, że you nie jest jednak aż tak demokratyczne, jak by się pozornie wydawało - w zależności od kontekstu funkcjonuje jako ty lub pan. Słowem, (…) używanie you [jest] powszechne i równie grzeczne (Szostkiewicz 2005: 92).

英語の you は非常に民主的なものに思われがちだが、実はそれほどでもない。文脈によって ty と pan どちらの機能も果たす対称詞である。つまり、（…）you の使用は一般的であると同時に、礼儀正しさを伝えることもできるのである。

1989 年以降、ポーランド語の親称 ty の使用範囲は広がっているものの、英語の you ほど様々な状況や相手に対して使用できるものではない。「英語では皆が親称を使う関係にある」という単純な認識をポーランド語における積極的な親称使用のモチベーションとしてしまうことは言語の形式的な借用にすぎず、英語とポーランド語それぞれの言語が機能する文化の違いが置き去りになってしまっていると言えるであろう。

Brown & Gilman（1960）は、対称詞が you ひとつに絞られた英語同様、他のヨーロッパ言語でもいずれは親称だけが残るであろうという見方を 1960 年の時点で発表している。Brown & Gilman（1960）の分析は主に英語・フランス語・イタリア語・ドイツ語を対象とするものであったが、ポーランド語についても、対称詞使用に見られるように、「民主化」の傾向として親称 ty の使用範囲が広がっていることから、Brown & Gilman（1960）の指摘が当てはまる部分があると言える。しかしながら、果たして敬称の pan/pani などの語が完全に消滅することはあり得るのだろうか。ポーランドを含む多くのヨーロッパ諸国において、社会が急速に民主化したにも関わらず、敬称は今でも広範囲で用いられており、親称がニュートラルな対称詞としての地位を確立している言語はほとんど見られない（Sikora 2011: 83）[17]。この観点において、重要なのは一般的なポーランド語話者が対称詞における「民主化」の傾向をどのように捉えているかということであり、ゆえに保守的な学術界の立場と比べてどの程度の差が見られるのかを調査する必要があると言えよう。ポーランド語の「民主化」や「アメリカ化」はもはや言語の形式的なレベルでの変化にとどまらず、ポーランド語話者の考え方における変化である（Kłosińska 2017: 37）。したがって親称使用の広がりは単なる流行ではなく、ポーランド語話者の価値観の変化が反映された現象として捉えるべきだと考えられる。この変化は主に若者の言語使用に見られる特徴だとこれまで指摘されてきた（Ożóg 2001: 82, Grybosiowa 2002: 5, Skudrzyk 2007: 112, Marcjanik 2015: 118 など）が、かつての調査から一定の時間が経過した今、当時の「若年層」がすでに「中年層」になっている事実をふまえ、いま一度様々な年齢層を対象とした言語意識の調査が必要だと言えよう。

3. アンケート調査

ここでは、対称詞使用に見られるポーランド語の「民主化」の一例として、1989 年以降簡素化された「ty への移行」に着目し、この現象をどのように評価しているかポーランド語話者に尋ねたアンケート調査の結果を紹介する。このアンケート調査については川本（2022）で詳しく解説してい

17 すでに言及したスウェーデン語はこの例外に当たる。

るため、ここでは一つの質問項目に絞り、必要最低限の記述にとどめる。

3. 1. 調査方法

調査にはポーランドのアンケート作成サイト Ankieter.pl（https://www.ankieter.pl）上で作成した 4 部構成のアンケートを用い、家庭内[18]から職場まで様々な環境における対称詞使用について広く質問項目を設けた[19]。このうち、本稿で言及するのは「簡略化された ty への移行を、どのように（ポジティブもしくはネガティブに）評価しますか？この現象についてどう思いますか？コメントを記入してください」[20]と記された質問項目で、自由記述式の回答を分析した結果を考察する[21]。

コメントの分析には回答データを反映した Excel シートおよびポーランド語コーパス作成ツール Korpusomat（https://korpusomat.pl/）を用いた。Korpusomat は各ユーザーが独自のテキストデータをもとにコーパスを作成し、索引付けすることができるアプリケーションで、特定の語に関する頻出度やコロケーション分析、テキスト全体におけるキーワード抽出などの機能も兼ね備えている（Kieraś & Kobyliński 2021: 49）。本調査では Ankieter.pl のサイト上から Excel にダウンロードした回答のテキストデータを Korpusomat に移し、作成されたコーパスをもとに分析データを自動抽出した。まず、Excel シート上でコメントを一件ずつ分析し、簡略化された「ty への移行」に関する評価を大きくポジティブ・ニュートラル・ネガティブの 3 種類に分けた[22]。次に、コメントの中で回答者が用いている語のコロケーションを Korpusomat で分析し、3 種類の評価それぞれで見られる特徴的な表現や、異なる評価間に共通する概念を読み取った。

3. 2. 調査結果・考察

3. 2. 1.　全体の統計データ分析

アンケート全体の回答数は 430 で、本稿で扱う自由記述式の質問項目には 401 の回答が集まった。このうち、「ty への移行」が簡略化されている傾向について、回答者の 59%が前向きな評価（43%が「ポジティブな評価」、16%が「どちらかといえばポジティブな評価」）を示し、28%は中立的な立場を、12%はネガティブな評価（9%が「ネガティブな評価」、3%が「どちらかといえばネガティブな評価」）を示した。回答者のうち数名は、質問項目について特に意見がないと答えたが、この類のコメントは全体の 1%にとどまった。以上のデータから、アンケートの回答者のうち半数以上が簡略化された「ty への移行」を前向きに捉えていることがわかる（図 1 参照）。

18　家族間での対称詞使用に関する調査結果は川本（2022）を参照。本稿では、「ty への移行」の簡素化に関する自由記述の項目を取り上げているのに対し、川本（2022）では家族（両親、祖父母、義理の両親、子どもの夫／妻）に対し実際に使用している対称詞についての選択式の項目に絞って考察を行った。

19　アンケートおよび調査方法の詳細については川本（2022: 186）を参照。

20　質問項目の和訳は筆者による（原語：*Czy ocenia Pan/Pani tendencję do szybkiego, łatwego przechodzenia na ty pozytywnie czy negatywnie? Co Pan/Pani sądzi na ten temat? Proszę o wpisanie poniżej komentarza*）。

21　この質問項目の調査結果については、Kawamoto（2022）でさらに詳しい分析・考察を行った。本稿ではその一部を取り上げている。

22　「ポジティブに」（pozytywnie）「ネガティブに」（negatywnie）などの語を直接用いていないコメントについては、「いいと思う」（podoba mi się）「好きではない」（nie podoba mi się）「賛成できる／できない」（jestem / nie jestem za）など自身の立場を示す表現をもとに分類した。

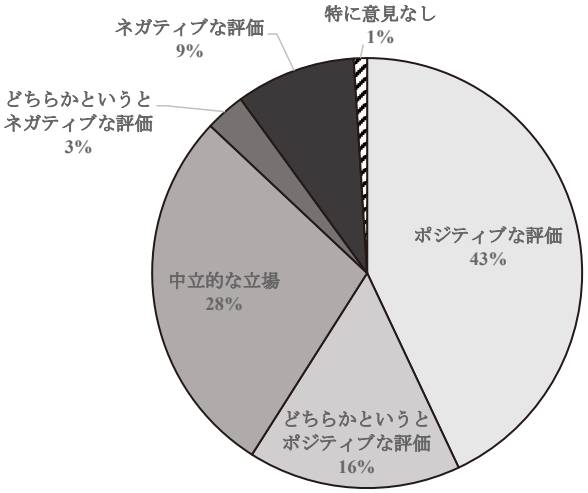

図 1:「tyへの移行」が簡略化されていることに対する評価

この「ty への移行」には年齢や性別など社会学的要素が深くかかわっているため、上に示したデータもこれらの観点から分析する必要がある。回答者 401 名のうち、「特に意見なし」と回答した 5 名を除き年齢別グループに分けると、次のようになる：18 歳以下（3 名）；19 ～ 29 歳（125 名）；30 ～ 39 歳（88 名）；40 ～ 49 歳（129 名）；50 ～ 59 歳（34 名）；60 歳以上（17 名）；年齢不明（7 名）。これら各グループにおける簡略化した「ty への移行」に対する評価は、次の表 1 に見られる通り、18 歳以下の回答者を除く[23] すべての年齢グループにおいて前向きな評価の多さが目立つ。

表1：年齢グループごとの回答結果

年齢（歳）	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ
～ 18	33,33%	33,33%	33,33%
19 ～ 29	62%	30%	8%
30 ～ 39	67%	23%	10%
40 ～ 49	56%	29%	15%
50 ～ 59	47%	41%	12%
60 ～	47%	24%	29%

既述の通り、親称使用の広がりは主に若者層で目立って観察されるという指摘が多いものの、本調査のデータを見る限り「若者」の境界線はそれほど明確に示されていない。50 代と 60 代以上のグループでは他のグループに比べて「ポジティブな評価」の割合が少なく、特に 60 歳以上のグループでは「ネガティブな評価」の割合が増えている。したがってこの年齢層のポーランド語話者は、「ty への移行」が簡略化されていることに抵抗を感じやすいと推測できるが、回答者数が他のグループよりも少ない（50 代－ 34 名、60 代以上－ 17 名）ことから、母数をより多くした調査での再考察が必要だと言えよう。

回答者の性別は女性が 299 名、男性が 94 名、どちらにも属さないと答えた回答者が 3 名いた。そ

23　18 歳以下のグループでは 3 種類の評価間に差が見られないが、このグループに属する回答者は 3 名しかおらず母数があまりにも少ないため、他の年齢層と比較し特徴を読み取るのは困難である。

れぞれの回答を年齢別データ同様3種類に分けた結果は、表2に示す通り。

表2：性別ごとの回答結果

性別	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ
女性	59%	28%	13%
男性	57%	34%	9%
その他	-	-	100%

大きな差は見られないが、女性からの回答でネガティブな評価が若干多い点については考察の余地がある。この質問項目の女性回答者からのコメントに明確な理由を読み取ることは困難だったが、ニュートラルな評価と取れる男性回答者からのコメントで一件、興味深い指摘が見られた：

1) Zależnie od sytuacji, może być negatywne z podtekstem seksualnym na przykład, lub pozytywne ułatwiające komunikację.
状況による。相手に下心がある場合などはネガティブなものだし、コミュニケーションが取りやすくなるという点ではポジティブにも捉えられる。［30代・男性］[24]

このコメントは男性の視点から書かれたものであるが、他の質問項目へのコメントでは女性の回答者からも、下心ゆえに親称を用いる関係に早く移行し女性との距離を縮めようとする男性の描写がいくつか見られた。このことから、「tyへの移行」によって話者間の距離が近づき平等な関係性が表される一方で、その距離感と立場の対等さが、相手を顧みず一方的な目的を達成するために利用されるリスクもあると考えることができる。この点に関しては今後インタビュー調査などでさらに内容を詳しく掘り下げる必要があるが、表2で示された性別ごとの回答における統計データの差は、僅かながらも今後の研究に重要な視点を与えていると言えよう。

3. 2. 2.　コメントのコロケーション分析

次に、コロケーション分析の内容も取り上げていきたい。コメントのテキストデータをKorpusomatに移した結果、3種類の評価それぞれでよく用いられている語が抽出された。本稿ではすべての評価コメントで共通して用いられている「距離」（dystans）の語に着目し、考察を試みたい。

ポジティブな評価コメントのうち37件、ニュートラルおよびネガティブな評価コメントのそれぞれ8件において、「距離」（dystans）の概念に言及されていた。対称詞の選択が相手との精神的距離を表すことは先行研究でも指摘されており（Grybosiowa 1990: 90など）、1989年以降「tyの移行」が簡略化されていることはまさに、この「距離」を簡単に縮めようとする傾向の表れだと捉えることができる（Marcjanik 2015: 118）。この点において、本調査のコメントにおいて回答者がこの「距離」の概念をどのように捉えているか分析することは、現代ポーランド語話者の言語意識を知る手がかりになると言えよう。

3. 2. 2. 1.　ポジティブな評価コメントにおける「距離」

簡略化された「tyへの移行」に対するポジティブな評価コメントにおいては、「距離」という語を「縮める」「縮まる」という意味の動詞skracać / skrócić（się）[25]またはその名詞形skracanie / skrócenieとの組み合わせで用いている例が最も多かった。このコロケーション単体が特定の評価を示すわけ

24　本稿におけるコメントの和訳はすべて筆者による。

25　ポーランド語のアスペクトにおいて、前者は不完了、後者は完了の動詞。

ではないが、コメントそれぞれの文脈で簡略化した「ty への移行」をポジティブに評価する表現として、「距離を縮める」「距離が縮まる」ことが言及されている。以下、例としていくつかコメントを紹介しておきたい：

2) Pozytywne **skracanie dystansu**.
ポジティブな**距離の縮め方**。［50 代・女性］

3) Myślę, że w większości przypadków jest [to] pozytywne zachowanie, ponieważ pomaga **skrócić dystans**.
距離を縮める手助けになるので、大半の場合はポジティブな言動に値すると思う。［20 代・女性］

4) Pozytywnie, mówienie na ty **skraca dystans** i otwiera ludzi na otoczenie.
ポジティブに評価する、相手を ty で呼ぶことは**距離を縮めて**くれて、人々が周りに心を開くようになる。［30 代・女性］

5) Pozytywnie. W ten sposób **skraca się dystans** między ludźmi i kontakt jest swobodniejszy.
ポジティブに評価する。それ（ty への移行が簡略化すること）によってお互いの**距離が縮まり**、関係がより自由なものになる。［30 代・女性］

上に挙げた「縮める」「縮まる」と意味が似ている語でもうひとつ、「小さくする」と言う意味の動詞 zmniejszać およびその名詞形 zmniejszenie もまた、いくつかのコメントで見られた：

6) Dla mnie jest to zjawisko pozytywne, **zmniejsza dystans** między ludźmi i daje poczucie bycia bliżej innych.
私にとってはポジティブな現象。人々の間にある**距離を縮めて**くれて、お互いがより近づいた感覚を与えてくれる。［30 代・男性］

7) Pozytywnie. To **zmniejsza dystans** i ociepla relację.
ポジティブに評価する。**距離を縮め**られるし、関係性に温かみを感じられるようになる。［40 代・女性］

8) Pozytywnie. Pozwala to na lepszą komunikację ze względu na **zmniejszenie dystansu**.
ポジティブに評価する。**距離が縮まる**ことでコミュニケーションの質が向上する。［60 代以上・男性］

ここで紹介したコメントにおいて、回答者は「距離」が「縮まる」ことによって話者同士の関係性がより良いものになる点、やりとりがしやすくなる点、温かさや自由さを感じられる点に言及し、そのきっかけとなる「ty への移行」が簡略化されていることを前向きに評価している。次に挙げる例からも同様の評価を読み取ることができるが、今度は「距離」の語が形容詞とのコロケーションで出現していることに着目したい：

9) Pozytywnie, chciałabym, aby wszyscy mówili do siebie na „ty” bez **zbędnego dystansu**.
ポジティブに評価する。**無駄な距離**をなくして誰しもがお互いに ty で呼び合うようになってほしい。［20 代・女性］

10) Pozytywnie. Życzyłabym sobie, żeby w języku polskim formy pan/pani kiedyś zanikły - utrudniają życie i wprowadzają **niepotrzebny dystans**.
ポジティブに評価する。いつかポーランド語の pan/pani が完全になくなればいいなと思っている―いろいろとやりにくいし、**必要のない距離**を生むから。［40 代・女性］

11) Pozytywnie. Skraca **sztuczne dystanse**.
ポジティブに評価する。**不自然な距離**を縮めてくれる。［40 代・男性］

（9）～（11）のコメントに共通しているのは、「距離」が「無駄な」「必要のない」「不自然な」

という形容詞によって否定的なものとして表現されている点である。この否定的に捉えられる「距離」を縮めてくれる（なくしてくれる）現象が「ty への移行」であり、したがってそのプロセスが簡略化されることはポジティブなものとして評価されているのである。この「距離」の排除は動詞のコロケーションを含む以下のコメントでも言及されている：

12) Oceniam to pozytywnie, ponieważ mówienie do siebie na „ty” **eliminuje dystans** między rozmówcami i pozwala na większą swobodę wypowiedzi.
ポジティブに評価する。お互いを ty で呼び合うことは話者間の**距離をなくして**くれて、より自由な発言を可能にしてくれるから。［20 代・女性］

13) Pozytywnie, **likwiduje dystans**.
ポジティブに評価する、**距離を排除して**くれるから。［40 代・女性］

14) Myślę, że to pozytywne. Przejście na ty **niweluje** niepotrzebny **dystans** między ludźmi.
ポジティブなものだと思う。ty への移行は人々の間にある必要のない**距離をなくして**くれる。［30 代･女性］

15) Pozytywne, **redukuje dystans** i niezręczności.
ポジティブなもの、**距離**や気まずさを**なくして**くれる。［20 代・女性］

これらのコメントでは「距離」が人間関係における問題として捉えられており､「ty への移行」はその問題の解決策だと理解することができる。「距離」があることはコミュニケーション上の障害となるため、その「距離」をなくしてくれる「ty への移行」のプロセスが簡略化されることは、前向きな傾向として評価されているのである。

3. 2. 2. 2.　ニュートラルな評価コメントにおける「距離」

ここまでポジティブな評価コメントを考察してきたが、ニュートラルな評価コメントに見られるコロケーションについても言及しておきたい。(2) ～ (8) で用いられていた動詞「縮める」(skracać) と「小さくする」(zmniejszać) がここでも見られたが、ポジティブな評価コメントとは異なり、「距離」を「縮める」ことが必ずしも肯定的なものとして捉えられているわけではない点が興味深い。また「距離を取る」という表現も具体的な状況説明で用いられ､「ty への移行」を踏みとどまるべき場面の例が示されている：

16) Jak już pisałam - zależy od sytuacji. Ja wolę trochę poczekać, bo **zmniejszanie dystansu** czasem ma negatywne skutki.
すでに書いた通り、状況によって異なる。**距離が縮まる**ことで良くない結果につながることもあるので、私は個人的に少し時間を取りたい派。［50 代・女性］

17) Przechodzenie na Ty **skraca dystans** między dwiema osobami. Jeżeli obie strony czują się dobrze w tej relacji, to nie mam z tym problemu.
Ty への移行は二者間の**距離を縮める**もの。お互いがその関係性に満足しているのなら、私は個人的に何の問題もないと思う。［40 代・女性］

18) Myślę, że dużo zależy od okoliczności. W przypadku spraw zawodowych wolę **zachować dystans**, który mi daje forma „pan, pani”, jednak prywatnie wygodniej mi się zwracać per Ty.
状況によって大きく左右されると思う。私は職場での関係では pan, pani の語を使うことで**距離を取り**たいけれど、仕事以外では ty で呼び合う方が話しやすい。［20 代・女性］

コメントの（16）と（17）では、「距離」を「縮める」ことが「ty への移行」の定義として言及されているにすぎず、直接的な評価が表現されているわけではない。興味深いのは（18）のコメントで、「距離を取る」ことが敬称の pan/pani などの語が持つ機能として描写されている。回答者は職場での関係においては敬称使用により「距離を取る」方が無難だと考えており、これはコミュニケーションの公的な場面と私的な場面を区別したいという意思の表れとして捉えることができよう。したがって、職場で敬称の pan/pani などの語を使用することは、仕事上とプライベートそれぞれでの人間関係を混同させたくないと考えるポーランド語話者の意思表示にもなり得る。

3. 2. 2. 3. ネガティブな評価コメントにおける「距離」

最後に、ネガティブな評価コメントにおける「距離」の概念についても触れておきたい。具体的なコロケーションとしては「距離を縮める」「距離の縮小」「距離を好む」「距離が侵される」「より近い距離」の組み合わせが見られる。すでに紹介したポジティブ・ニュートラルな評価コメントと比較をするうえで、特に「距離の縮小」に関わる例をいくつかとり挙げてみたい。次の例では、「無駄に」という副詞により「距離の縮小」に対する全体の評価が否定的なものになっている：

19) Negatywnie. Niepotrzebnie **skraca dystans**.
ネガティブに評価する。無駄に**距離を縮める**から。［20 代・女性］

また、「ty への移行」はなんとなく起こる変化ではなく、きちんと考えた上で行動に移すべきとするコメントでも、回答者は「距離の縮小」に言及している：

20) Raczej negatywnie. **Skraca dystans**, ale lepiej żeby to było wynikiem umowy niż naturalnym zachowaniem.
どちらかといえばネガティブに評価する。**距離を縮める**けれど、なんとなく自然に起こるものではなく、きちんとお互いが意思を持って決めた方がいい。［40 代・男性］

21) Negatywnie. **Skracanie dystansu**, jakim jest przechodzenie na „ty", powinno być przemyślane.
ネガティブに評価する。「ty への移行」は**距離を縮める**ので、行動に移す前にきちんと考えるべき。［40 代・女性］

ここで着目したいのは、上の（20）と（21）どちらの回答者も「ty への移行」そのものに対して否定的なわけではないという点である。ネガティブに評価されているのは「ty への移行」のプロセスが簡略化されていること、すぐになんとなく親称を使うようになっている傾向で、これはまさに現代ポーランド語の「民主化」に対する抵抗感として捉えることができよう。軽い気持ちで親称に移行した場合、その後の関係が気まずくなる可能性があるため、使用する対称詞の変更に対し慎重な姿勢を見せるポーランド語話者もいることがわかる。

4. おわりに

1989 年の体制転換以降、ポーランドが民主主義国家の仲間入りを果たしたことは歴史上の重要な成果として前向きに受け入れられることが多いものの、ポーランド語が「民主化」していることに関しては保守的な立場を取る言語学者がまだまだ多い（2.4. を参照）。一方で、アンケートの回答から読み取れる通り、ごく一般的なポーランド語話者の中には、親称使用で表現される平等さや距離の近さをポジティブに捉える声も少なくない（3.2.1. を参照）。同時に、状況によって ty を使うことに抵抗を感じる話者がいることも事実であり、相手に合わせた対称詞使用が求められていることも

忘れてはならない。かつて 20 世紀初頭に、pan/pani などの語が階級的な差を表すものではなく、敬称として広く用いられるようになった際、その受容に様々な立場が見られたように、1989 年以降の親称使用に象徴されるポーランド語の「民主化」もまた、重要な議論の的となっているのである。本稿で分析した「距離」をキーワードとしたコメントからは、ポーランド語における敬称の完全廃止に賛成する立場があることもわかった（コメント 10 を参照）が、敬称の使用が状況によって一定の精神的距離を保つ手段となっている（コメント 16 ～ 21 を参照）ことも読み取ることができた。したがって、Brown & Gilman（1960）が予測した敬称の完全な消滅はポーランド語にとってまだまだ遠い存在だと考えられる。Sikora（2011）が指摘しているように、現時点で親称がニュートラルな対称詞である傾向は見られず、この点においてポーランド語は今もなお「民主化」の途中にあると言えよう。引き続きポーランド語対称詞使用における「民主化」を観察しながら、話者の年齢や性別だけでなく、居住地域や職業といった他の社会学的要素にも着目しつつ考察を深めていくことが、今後の課題となる。

資料一覧

〈引用文献〉

Balowska G., 2006, *Demokratyzacja języka a język literatury czeskiej*, „Bohemistyka” nr. 4, s. 285-294.

Brown R. & Gilman A., 1960, *The Pronouns of Power and Solidarity*, In: T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, Cambridge, pp. 253-276.

Brown P., Levinson S. C., 1987, *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge.

Brückner A., 1916, *Ty - Wy - Pan. Kartka z dziejów próżności polskiej*, Kraków.

Dąbrowska A., 2001, *O sposobach zmniejszania dystansu między rozmówcami*, [w:] Habrajska G. (red.), *Język w komunikacji*, t. 1, s. 187-194.

Duda H., 2001, *Język polski po komunizmie: nowomowa, demokratyzacja języka, zapożyczenia z języka angielskiego, wulgaryzacja*, [w:] Mitrinović V. (red.), *Język, literatu*ra *i kultu*ra *Słowian dawniej i dziś* - III, s. 71-83.

Grosse J., 1906, *Pan, ty czy wy?* (tekst zamieszczony w „Poradniku Językowym” nr 4, s. 49-51, wydanym w 1907 r.).

Grybosiowa A., 1990, *Formy ty i pan(i) w kontaktach społecznych*, „Poradnik Językowy”, z. 2, s. 88-92.

Grybosiowa A., 2002, *Nowe sytuacje - nowe zachowania grzecznościowe*, „Poradnik Językowy” nr 2, s.3-8.

Grybosiowa A., 2003, *Język wtopiony w rzeczywistość*, Katowice.

Kamińska-Radomska I., 2015, *Współczesna etykieta biznesu w codziennej praktyce w Polsce*, Warszawa.

Kawamoto Y., 2022, *Przejście na* ty *jako demokratyzacja w języku polskim. Analiza danych ankietowych*, „LingVaria” t. 34, nr 2, s. 111-128.

Kieraś W. & Kobyliński Ł., 2021, *Korpusomat - stan obecny i przyszłość projektu*, „Język Polski” CI, s. 49-58.

Klemensiewicz Z., 1946, *Pan i Obywatel*, „Język Polski” nr 2 (kwiecień-marzec), s. 33-42.

Kłosińska K., 2017, *O zagrożeniach i bogactwie polszczyzny - dwadzieścia lat później*, [w:] Kłosińska K., Zimny R. (red.), *Przyszłość polszczyzny - polszczyzna - przyszłość*, Warszawa, s. 36-47.

Kudra B. & Kudra A., 2006, *Demokratyzacja języka - demokratyzacja w języku (na przykładzie języka w mediach)*, „Media - Kultura - Komunikacja społeczna”, nr 2, s. 342-346.

Łaziński. M., 2006, *O panach i paniach. Polskie rzeczowniki tytularne i ich asymetria rodzajowo-płciowa*, Warszawa.

Łoś J., 1916, *Od „ty” do „pan”*, „Język Polski”, t. 3, s. 1-10.

Marcjanik M., 2007, *Grzeczność w komunikacji językowej*, Warszawa.

Marcjanik M., 2015, *Współczesna etykieta językowa - zmierzch wartości?*, „Studia Medioznawcze" nr 4 (63), s. 115-119.

Marcjanik M., 2020, *ABC grzeczności językowej*, [w:] Bańko M. (red.), *Polszczyzna na co dzień*, Warszawa, wyd. II, s. 231-310.

Mickiewicz A., 1834, *Pan Tadeusz*, Paryż.（工藤幸雄（訳）1999『パン・タデウシュ』講談社）

Nitsch K., 1907, *„PAN", „TY" CZY „WY"?*, „Poradnik Językowy" nr 4, s. 52-53.

Ożóg K., 2001, *Polszczyzna przełomu XX i XXI wieku. Wybrane zagadnienia*, wyd. I, Rzeszów.

Ożóg K. 2006, *Współczesna polszczyzna a postmodernizm*, [w:] Oronowicz-Kida E., Ożóg K. (red.), *Przemiany języka na tle przemian współczesnej kultury*, Rzeszów, s. 98-109.

Przybylska R., 1999, *Formy zwracania się do osób drugich w Panu Tadeuszu*, [w:] Kurzowa Z., Cygal-Krupa Z. (red.), *Mickiewicz i Kresy*, Kraków, s. 111-130.

Rachwał M., 1992, *O przyczynach zmian systemu adresatywnego języka polskiego w XIX wieku*, [w:] Anusiewicz J., Marcjanik M. (red), *Polska etykieta językowa*, „Język a Kultura" t. 6, s. 41-49.

Sawicka E., 2011, *Savoir-vivre: podręcznik dobrych manier*, Warszawa.

Sikora K., 2010, *Grzeczność językowa wsi. Część I. System adresatywny*, Kraków.

Sikora K., 2011, *„Z panem i kmieciem po świecie" - o tradycji i współczesności w zwracaniu się do drugich*, „LingVaria" nr 2 (12), s. 79-88.

Skudrzyk A., 2007, *Normy grzecznościowych zachowań językowych (etykieta językowa, savoir-vivre, bon ton, dobre wychowanie, grzeczność językowa)*, [w:] Achtelik A., Tambor J. (red.), *Sztuka czy rzemiosło? Nauczyć Polski i polskiego*, Katowice, s. 105-123.

Stone G., 1989, *Formy adresatywne języka polskiego w osiemnastym wieku*, „Język Polski", t. 69, s. 135-142.

Szostkiewicz A., 2005, Hello, how are you? *Angielska grzeczność nieodświętna*, [w:] M. Marcjanik (red.), *Grzeczność nasza i obca*, Warszawa, s. 87-102.

Warakomska D., 2005, *Grzeczność w Stanach Zjednoczonych*, [w:] Marcjanik M. (red.), *Grzeczność nasza i obca*, Warszawa, s. 263-282.

Wierzbicka A., 1999, *Język - umysł - kultura*, Warszawa.

Wojtak M., 1992, *Wybrane elementy staropolskiej etykiety językowej*, [w:] Anusiewicz J., Marcjanik M. (red), *Polska etykieta językowa*, „Język a Kultura" t. 6, s. 33-40.

川本夢子（2021）「ポーランド語の『礼儀』に関する社会言語学的考察：謝罪表現のケース・スタディ」『言語・地域文化研究』no. 27　東京外国語大学　pp. 271-286

川本夢子（2022）「ポーランド語における家族間での対称詞使用に関する一考察」『言語・地域文化研究』no. 28　東京外国語大学　pp. 181-195

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書

〈辞書〉

Wielki słownik języka polskiego (WSJP PAN): https://wsjp.pl/

Słownik języka polskiego (SJP PWN): https://www.sjp.pwn.pl/

ポーランド語辞典　白水社

〈URL〉

Ankieter.pl: https://www.ankieter.pl（最終閲覧：2023 年 7 月 23 日）

Korpusomat: https://korpusomat.pl（最終閲覧：2023 年 7 月 23 日）